

經濟論叢

第七十三卷 第一號

資本蓄積と外國貿易……………松 井 清 (1)

ドイツ帝國主義と經濟政策……………大 野 英 二 (19)

信用貨幣とインフレーション……………眞 藤 素 一 (45)

~~~~~  
日本鐵鋼業の問題點……………菅 谷 重 平 (63)

---

[昭和二十九年一月]

京都大學經濟學會

# 日本鐵鋼業の問題點

菅 谷 重 平

現在、私たちが使つてゐる鐵という字は比較的新しい字だそうで、昔は金へんに夷エビスという字をかいた鐵という字が使われていたことである。つまり夷エビスどもが使うような金屬ということで、極めて野蠻な、侵略的なひびきをもつていたといえるのである。

しかし鐵の使用が、さういう村の鍛冶屋的段階からだんだん進んでくると、鐵という字も段々出世して今日では鐵——すなわち金の王なる哉——という字が使われるに至つてゐる。チタンとかその他新しい金屬が最近ではいろいろ出てきているが、やはり何といつても鐵は金屬の王なる哉というにふさわしい風格と歴史をもつてゐる。

勿論王という言葉が示しているように、それは近代文明をリードしているという輝しいものをもつてゐるが、王様はいつも名君だとは限つたわけではなくてときにはネロのように暴君もあるので鐵の歴史や性格にもさういつた面がある。しかしもし今日、鐵がさういふ横暴な面をもつとしたならば、鐵は金屬王なる哉というよりも昔のように金屬の夷エビスと書いた方がよいのかもわからないが、又そうなれば現在使つてゐる鐵の畧字の様に金を失う産業になるであらう。

くだらない話から始まつたが、鐵鋼に對する價值判斷を物理的に使用されている分野が大きいということだけから下されては誤りであつて、もつと廣い國民經濟的な立場から檢討すべきではないか。そういつた意味のことを最初に斷つておきたかつたまでである。

### 一 日本鐵鋼業の特質

ところで、今日の日本の鐵鋼業にはどんな問題點があるか。この點についてのべるにはまず日本の鐵鋼業の特質ということから始めなければならぬと思う。

既知の如く日本の鐵鋼業はその誕生以來國家の手厚い保護の下に育つてきたのであつて、それをしには今日の鐵鋼業があるとは考えられない。これは必ずしも鐵鋼業に限つたわけではないが、この點が西歐の場合と著しく相異している。日本の資本主義化が始まろうとするときに、列國はすでに活潑な植民地争奪戦に乗り出しており、うかうかすると日本までも列強の植民地になりかねない情勢であつた。それで維新政府は、こういう外敵から國を守る必要にすぐ迫られたわけで、そのためにはどうしても重工業を急速に育てなければならぬというわけになつたが、重工業のような、その建設に多額の資本を要するとか、新しい外國の技術を要するとか、あるいは原料を海外から廉價に手に入れる必要があるようなものは、民間の資本蓄積が進んでそして重工業部門に投資されるのを待つという餘裕はなかつた。そこでどうしても「上から」の政策が必要ということになり、いわゆる官營工場の設立をみたのである。具體的にいえば、兵器や鐵道關係に素材としての鐵鋼を提供すべく大橋鐵山を買収し、官營釜石製鐵所を設けて出銃をはじめたのである。當時は建設關係にも重點がおかれていたが、何といつてもその中心は軍

需部門であり、製鋼部門での海軍造兵廠のクルップ坩堝製鋼法や、横須賀海軍造兵廠の重油使用平炉製鋼法、吳海軍造兵廠の石炭使用平炉製鋼法、あるいは陸軍の大坂造兵廠の製鋼法などは、わが國鐵鋼業の搖籃時代の中心をなしていたものである。明治二十九年、今の八幡製鐵所が官營として大々的に發足したのも、そのもとをただせば、すでに明治十年代に軍部によつてその設立が提唱されていたのである。

それはともかく、日本の鐵鋼業がすぐれて國家的な色彩をもつてきたことは事實であり、それは原料取得の面でも、製品の市場の問題でもはつきりしている。製鐵業獎勵法、製鐵事業法、各種の保護關稅、あるいは戦後にこられた補給金政策などといった法制的な面がこれをカバーしたということは周知の事實である。

たとえば原料面についてみると、日本の鐵鋼業は國內原料にめぐまれず鐵鑛石については戦前はその九〇%、戦後は七五%を海外に依存し石炭については、戦前は四〇%、戦後は三四%を海外に依存しているのである。勿論ただ原料の海外依存度が高いというのみであるならば、鐵鑛石におけるイギリス、ザール、チェコや、石炭におけるフランス、ルクセンブルグ、イタリー、スエーデン等の如く諸外國にも多いが、戦前の日本の場合には、多くが普通のコマーシャル・ベースというよりも、いわゆる「錦の御旗」の下に持つてきたというのが遺憾ながら真相である。今日では、鐵鑛石の二八%、石炭の七七%をアメリカから輸入しているが、戦前は鐵鑛石の大部分は中國、マレーから、石炭は中國と樺太から輸入していたのであつてこれらの地域から不等價交換の形で運んでいたのである。勿論、壓迫的に武力を背景にしたという場合もあるが、さうでなくとも、原地側の炭鑛なり鑛山に日本の資本が投下されて、それが國家の保護をうけていたことが通例でありこの點では國家の保護が濃厚であつたといつて差支えないかと思う。

製品の販路、市場の點についても國家の保護は明瞭である。なるほど統計面からみると、最終製品が軍需として使われたという數字は小さいとも云いうるが、平時といわれる昭和五年から十二年にかけて、鐵鋼の製品需要は國家の財政インフレーションによつて造出された市場にむけられた。當時、とくに昭和七年以降すすめられた産業擴充は陸・海軍の工廠が中心であり、その周邊にこれも國の保護の厚かつた機械・造船・車輛工業が繁榮したのである。ストライク報告によれば、これら軍需を中心とする國家財政に支えられた鐵鋼需要は年間百萬トンに達したといわれている。昭和十二年の日華事變から、さらに太平洋戰爭に入つてからの鐵鋼需要がこの傾向を一層強めていつたことについてはあらためて云うまでもない。殘念ながら、今日ではこれも確かな資料はないが、國民經濟研究所に保管されている物動計畫の參考資料によると軍需關係の比率は昭和十四・五年ごろにおいて全體の約五五%、昭和十八・九年ごろになると約八〇%乃至八五%が軍需にむけられたということになる。今日の經濟學の表現を借りるならば、供給の面でも需要の面でも、日本の鐵鋼業を支えていたものは、國家財政とくに軍事的色彩の強いそれであつたわけである。

戦後においては原料の取得面では若干事態が變つてゐる。前述の如く、原料の大半はアメリカより輸入されているが、これは國家の武力的背景などというものは全然ない。それどころか、アメリカの「援助」という形で最初は輸入されている。この援助なるものが、どんな性格をもつていたかということについては詮索しないが、とにかく「正當の」貿易でなかつたという點は注目すべきものであると思う。對日援助がなくなつた後は、鐵鋼原料の輸入資金は何で賄われたかと云うと、以前の生糸というようなものではなく、周知のごとく特需という文字通り「臨時のドル」收入によつて賄われてきたのである。これは直接には國家依存ではないが少くとも鐵鋼業獨力のものであ

つたとは云えない。

市場の點では、戦後は軍需こそなくなつたが、國家財政に負う部分が大きい。すなわち、財政に依存する駐留軍、國鐵や復命貸出に大きな比重をしめる石炭鑛業や、補給金産業であつた鐵鋼業や化學肥料に對する鋼材の荷渡高は昭和二十一・二年頃は全體の六―七割を占めていた。

ドッジラインによつて、これら國家資金の財布のヒモが締められると、忽ち鐵鋼業は多くの他の産業と同様に在庫と賣掛金に悩む事態に遭遇したが、そこに圖らずも朝鮮動亂が勃發して鐵鋼業は再び活路を見出したのである。即ち二六年度においては、全出荷四八〇萬トン中輸出八五萬トン、特需二三萬トンと全體の約四分の一を占め、特需が三萬トンに減少した二七年度においても輸出が九〇萬トンあつて大體前年の水準を維持し得たのである。

さて朝鮮の休戦によつて、一般に後退を豫想された景氣が案外昭和二八年度になつてからも良好であつたことは、鐵鋼業についてもいいうるのであり、年産五六〇萬トンベースの生産を現在つづけているのである。これは輸出の不振にも拘らず旺盛な内需があつた故であるがその内需が何かということになると、經濟審議廳の最近の「經濟月報」にも示されるように、電源開發や公共事業の如き財政投資に關連する部門が大きな役割を果していると思われる。いわば財布はここでも國家がにぎつてゐるわけである。

このように日本の鐵鋼業には、いろいろ特質があるが何といつても國家の有形・無形の保護があつたという事實が最も強い點だと思ふ。しかも不幸なことにそれがしばしば軍需的な性格をおびていた。さうした點から今日鐵鋼業は軍事産業であるとか、M S Aを無條件に歡迎しているとかいわれるが、果してさうだときめつけて問題を片付けてよいかどうか、甚だ疑問だと思われるので以下この點について言及する。

## 二 日本經濟の工業化と鐵鋼業

日本の鐵鋼業が、今まで軍需産業面とか、臨時的な輸出に中心をおいたからもうそんな鐵鋼業はやめてしまえとは行きすぎであり、今更云うまでもなく、鐵道とか一般機械、ビル、住宅建築など生産資材としても消費材としてもまだまだ鐵鋼が日常のわれわれの生活に役立つ部面は大きいのである。

統計の示すところによれば、鋼の消費高は大體文明——常識的な意味での文明の進歩に比例するようであり、アメリカ、カナダ、スエーデンなどという國が一人當りの鋼消費量が高くなつてゐる。日本は、生産では世界第六位に位しているが、鋼の一人當り消費は製鐵國の中で第十四位であり、製鐵國でなくとも歐州や南米あたりには消費の高い國もあるので實際には世界で二十番ぐらゐになるかと思う。一人當りの消費を數字でみると、最高がアメリカの五六五kg、カナダの三七五kg、スエーデン二九二kg、イギリス二七八kg、ベルギー二一〇kg、等（一九五〇年）の如くであり日本はわずかに五〇kgである。参考に東南アジアについてみると平均で八・五kgというみじめなものでインドに於ては五kgにすぎない。これからみても日本においてもまだまだ鋼材を使用する餘裕があるはずだといふことがわかる。問題はこうした潜在的な需要、あるいは欲求というものを如何に有効需要化していくかということだと思ふ。なお、國民所得と鋼消費の關係も一般に國民所得の高い國ほど鋼消費が多いようであり、それは、あるいは鋼消費が多いから所得が多いのであると表現すべきかも知れない。いづれにしても現在程度の鋼材の需要ではまだまだ近代國家の水準ではない。

それから鋼材の品種別消費という點から日本の鐵鋼業はどういうことになるか。一般に、アメリカのように資本

主義が順調に進歩したところでは、鐵鋼の需要は、最初は棒や形鋼に中心がおかれるが、のちには消費材に關係の深い板類ののびが著しくなつてゐる。今日のアメリカでは石油のパイプとやらんで自動車や罐詰に使う薄板の生産が大きな割合をしめてゐる。日本の場合には、昭和二六年まででは棒や形鋼の生産割合が戦前より低く、薄板の消費が割合に多い。しかし、これは正常な消費の形ではなく、實際には戦災の復興のために棒や形鋼がむしろ多いのが本筋であろう。現在では棒、形鋼の割合は三〇%位になつてゐるが、これはもつと高まつてよいのではないか。勿論そのことは薄板なり、パイプの生産が絶對量として現在の程度でよいというのではない。薄板にしても、今ぐらゐの規模で早くも生産過剰などが問題にされるのはさびしい限りである。

ところで、日本の經濟をこれからのように運営するかについては、甚だ問題の多いことであるが、經濟力を充實さすべきだということに異論はないようである。そのためには工業が推進力になり、即ち工業化をすすめていかなければならないということについては大方の異論はないであらう。その工業の中でいかなる工業を伸ばすべきかについては、議論がなかなか多いが、少くとも長い目でみれば鋼材なり機械といつた重工業部門が中心になつていかなければならないとみるのが順當ではないか。勿論、私はもはや纖維産業の使命は終つたなどというものではないが相對的にみればその衰退を認めないわけにはいかない。棉花や羊毛を全部海外に仰いで非常に多くの外貨を食うというだけではなく、その存在意義を高からしめていた輸出も、海外諸國特に後進國の進出によつて市場がせばめられてゐるといふのは、何としてもマイナスだといわざるをえない。そこで、鋼材などの部門が注目されるわけ、第一には國內の機械化をすすめる上に大きな期待が寄せられること、第二には機械輸出のための粗材提供者としての地位が注目されることがあげられるわけである。

今日の鋼材の消費先をみると、機械が十%程度、船舶も大體同程度、金屬や鐵鋼部門が大體各二十%位、建設關係が大體六%位等の如く重要産業部門に壓倒的に多く使用されている。これは如何に鐵鋼が國の經濟力の充實に大きな役割を果しているかを示すものであろう。とくに私は機械部門にむけられる鐵鋼の需要に注意すべきであらうと思う。

輸出についてはさきほども少しのべた如く、戰後特に動亂直後は大いにのびたわけで、それによつて大いに外貨を獲得したが、鋼材の直接輸出というのはそれが臨時的な市場であるという點で感心しないし、外貨手取率という點からも機械にして輸出した方が一層よいということはいうまでもない。今日鋼材の輸出は月平均十萬トン以下の水準に落ちてゐるがやはりこの點で問題を反省してみることも必要かと思う。

兵器産業はもちろん鋼材の需要を形成するが、やはり不健全であるという點でのぞみをあまりかけるのは良くないことだといわなければならぬ。

そのようなことをしなくとも鐵鋼業としては、日本經濟の工業化を推進するについてまだまだ正常な形でお役に立つ面がいくらでも残つてゐると思う。

### 三 鐵鋼業の自立化と合理化について

と云つても、今日のままの形で鐵鋼業を放置しておいてさういうお役に立ちうるかという問題はさう簡單ではない。たとえば、國際競争力という點一つとつても、鋼材は纖維などと違つて必ずしも充分なものではない。勿論素材そのもので對抗しなくとも、機械加工の段階で合理化を行えばよいのではないかという議論もあるが、やはり鐵

鋼は鐵鋼で合理化されていなければ機械工業なりその他の合理化もすまないであろう。

鐵鋼の市場は、さきにも述べたとく軍需であるとか、特需であるとかの如き他方本願的なものに寄りかかることが大きかつたために合理化を阻害された部面がかなり多いと思われる。鐵鋼界には「王様か乞食か」という言葉があるが、それは、鐵鋼が景氣變動のアンプリを強くうけるのであることを物語っていると同時に、鐵鋼業の當事者の中にも何年かに一度訪れるブームをとらえてそのとき稼せぎさえすれば、それでよいではないかという安易な氣分があつたことを物語るものであらう。

しかし、安易な經營のために當事者はそれですんでも消費者の立場からいえばさうはいかぬ。儲るときにうんと儲かつて、おまけに設備もほとんどふやすし、それが駄目になると、國內と輸出の間に二重價格をつくつて、高い値段で國內に賣る。設備の方は設備の方で、どんなものでも稼動させるべく無理な需要を作つて維持する。補給金さえも要求し出すかういつた状態では國民經濟的にみれば何としてもマイナスといわざるをえない。

日本の鐵鋼業は現在操業度が極めて悪い。二七年々間でみると、製鉄では五八・九%、製鋼では五六%、壓延では三七・三%にすぎない。これでは合理化などされるはずがない。

主要國の鉄鐵の熔鑪の一基當り生産量をみると、日本は五四九トン(以下いづれも一九五一年)でアメリカの七三六トンには遙かに及ばない。ドイツの三三〇トンやイギリス、ベルギーの二七〇トン台を凌いでいるがこれは小型のものが遊休状態にあるからで、規模別にみた場合には必ずしもいいとはいえない。しかも熔鑪も最近ではだんだん規模が大きくなつていようであるからいつまでも古い小型の爐を抱えておくことは好ましいことではない。この點は平爐の規模となると一段とハッキリしてくる。日本の平爐の平均爐容は冷鉄使用で三八・七トン、熔鉄

で七二・三トンであるが英米のものは、英米勞働生産性委員會の資料によると、イギリスでは冷銑の場合六一・六トン、熔銑の場合で一二五・八トン、アメリカでは冷銑使用の場合には八二・九トン、熔銑使用の場合には一三三トンと著しい相違がある。日本では昭和十年ごろから熔鑛爐とともに平爐の新設が行われたが、當時としては大型の一〇〇トンから一五〇トン爐のものができたといつても、數としては六〇トンから四〇トン未滿のものが非常に多い。こんなことは英米ではなく、おまけにその後建設されたものは英米では非常に大きくなつてゐるのに日本では殆ど新しいものができてゐない。日本で最も新しく且つ最も大きいものは富士製鐵廣畑工場の一五〇トン爐であるがそれ位のは我國には多數にある。それに廣畑工場のさえもできてからすでに十四年も経過してゐるのでありこれでは合理化したものをのぞむことが全く無理である。

このように小さなものが古いままで多く残つてゐるといふ點に問題があると思う。なるほど政府でも合理化計畫を積極的に推進されるようであるが、新しいものを建てたとしても舊いものはそのままにしている。これでは過剩投資とか二重投資とかいふことが問題になるのも尤もなことであり、小さい非能率的なものは整理する必要があると思う。その點をハッキリしておかねば小さいものといつてもやつぱり企業は企業であり、それなりに稼働しようという衝動にかられるわけで、さうなればいつまでたつても問題は尾を引くわけで、新しいものを作りばなしということは、整理というより濫立という現象を呈するものではないだろうか。

要するに、日本の鐵鋼業の合理化なり自立化を阻んでゐるものは濫立というか無放任主義にあると思う。これでは誰もがウダツがあるはずがない。勿論さきにのべたごとく鐵鋼の需要はまだいくらでもあるわけであり、現在の設備は量としてはあまるということはないわけであるが、そのためには設備的に一新したものでやればよいと思

う。

#### 四 日本鐵鋼業の將來の「型」

それでは日本の鐵鋼業のあるべき姿とは一體どんなものであるか。最後にこの點について簡單にふれたいと思う。その第一は、日本の鐵鋼業はアジア經濟の一環として考えるべきで、日本だけの立場を考へてその存立を圖るべきでないという點である。

さきごろ私は「アジアにおけるシェーマンプランの設立」ということを提出したが、要するにアジア單位に鐵鋼業を考へるべしというのである。アジアにはめぐまれた鐵鋼原料があり、それを皆開發を行い日本に持つてこようというのでは、原地人の民族感情をきづつけるといふばかりでなく、經濟的にも全くむだである。日本では差當り若干能率の高い熔鑪と、それに見合う優秀な平爐を残して専ら機械工業なり加工高の高い部門を受け持つことにするようにする。原料や製品については單一市場、單一價格ということを目標にして、ヨーロッパのものに對抗しうるようなものをつくりあげる。そして、最も立ち遅れたアジア地域を急速に工業化して、この地域の低い生活水準をひきあげる、こういつた點に目標をおくわけである。

勿論、このような考へ方が今據にできるとは考へられないがそれに近づくように努力することは大切だと思ふ。なるほど、本尊のヨーロッパのシェーマンプランには政治的にも、經濟的にも仲々複雑なものが存するようであるが、ともかくヨーロッパに一つの協同體をつくらうという理想主義的な行き方は模倣してもよいのではないかと思ふ。私がアジアにおける協同體を提唱すると、それは如何にも大東亞共榮圈のやき直したという反論があるようだ。

がそれならば一體協同していく以外にやつていく道があるかどうか問題である。私がいう協同とは互恵互讓であつて別に特に日本がどうというわけでない。むしろ、賠償問題など現在モヤモヤしている状態を幾分でも明るくするように日本の鐵鋼業界がよびかけるべきであると考え。呼びかけるということについて、さういう態度がいけないといわれる人があるがそれは呼びかけるすぐその口で「原料を頼む」とか「製品を買へ」などという一方的要求を持ち出すからだと思ふ。これらの點についてはいづれあらためて御話し致したい。

第二の點は、鐵鋼業は平和的な用途にできるだけその活路を見出すべきであるということである。前述のごとく日本の鐵鋼業は、日本あるいは世界の軍事的な需要に支えられた點が非常に大きかつたがこれは非常な汚點だと思ふ。私は鐵鋼業がすべて戦争に奉仕したとは思わないし、鐵鋼業といえはすぐ軍需工業であるときめつける人々にもくみしないのであるが、過去に於て多分にさうした環境におかれたということは事實である。しかし、平和的に役立つ面はまだまだいくらかも残されている。したがつてその意味での鐵鋼業の生きる道を聲を大にして叫びたいと思ふ。

これについて、私はさきの「アジアにおけるシューマンプラン——アジアの協同體」に中國を參加させることを希望するが一部の人にはこのよ様な提案は荒唐無稽にきこえるかも知れない。しかし、日本の鐵鋼業の歴史をみれば、中國との提携が如何に重要なものであるかはすぐお判りになる筈である。徒らに政治的に拘泥しているのは良くないことだといわなければならぬ。

もうすてに御承知のことと思ふが、十一月號の（昭和二十八年）「中央公論」に、アメリカのナショナル・ステール會社の社長であるアーネスト・T・ウエイヤー氏——この人はいくつかの實業家團體の役員もしているアメリカ

かのレツキとした資本家であるが——が「アメリカはひとりでは行けない」という副題で、「海外からみた國際事情私見」という一文を書いている。要するに氏がいわれることは、徒らに恐怖をかりたてて國際間の不安を生み出すことは愚の骨頂で、お互に虚心擔懷に話し合い、やつていけばお互いの經濟のためにも生活のためにもよいというのであつて、このことは今日の日本と中國の間についてもいえるかと思う。いたづらに政治的に右にせよ左にせよレッテルを貼り合うことは進歩をもたらすものではない。

話しが脇にそれたが、最後に鐵鋼業というより日本經濟全體の運營について一言ふれて終りたいと思う。

それは鐵鋼業をもつと計畫的に行へということである。かつて私は、「銑鐵の國家管理」を提唱したことがある。そして今日ではもつと大きい意味の統制が必要だとさえ感ずるのであるが、しかしそれが今の時代では非現實的だといふのであれば必ずしもその點を固執するわけではない。しかし何らかの計畫性をもたせるといふことだけは是非必要だと思ふわけであつて、そうでなければ何時までたつても鐵鋼業は景氣の變動のたびごとに一喜一憂する「王様か、然らずんば乞食か」という浮草のような不安定性を克服することはできないであらう。

しかし、計畫性といつても昔の軍隊の「靴が合なればや足を切れ」式のものであつては勿論困るわけであり、そこはもう何處も苦い經驗をしてきたわけであるから當事者たちの「教智」に期待することに致したい。

\* 本稿は昭和二十八年十一月十三日に開催された京都大學經濟學會大會公開講演會に於ける講演要旨である。